

演題16. 顔面動脈異常の1例について

○都筑 文男, 恩田 千爾

松本歯科大学口腔解剖学第一講座

右側上唇動脈と左側下唇動脈の欠如例について報告する。上條は Adachi の分類を整理し発育の程度によって顔面動脈を8型に分類し、顔面動脈の欠如は Adachi と同様顔面横動脈によって代償されると記している。しかしそれらの代償や分類にあてはまらない例に遭遇したので報告する。

材料は1960年の解剖学実習に使用した24例中の1例である。

〔右側〕顔面動脈は顎下腺の中央部でオトガイ下動脈を分岐した後、咬筋前下角で下顎底を越え顔面へ向かう。分岐部の太さは顔面動脈、オトガイ下動脈とも2.0mmで細い。顔面に出た顔面動脈は口角へ向うが、下顎底と口角を結んだ線の中央よりやや口角よりで細い上方に向う枝と下唇動脈に分かれる。上方へ向う枝は上唇まで達せず、下唇動脈が顔面動脈の終枝となっている。顔面動脈は下唇動脈となる前で頬動脈と顔面横動脈の細い枝で吻合している。上唇は反対側の上唇動脈によって、鼻背枝と眼角動脈の分布領域は眼動脈の枝の鼻背動脈によって養われている。

〔左側〕顔面動脈は顎下腺の中央部でオトガイ下動脈を分ける。太さは顔面動脈3.0mm, オトガイ下動脈2.5mmで右側より太い。咬筋の前下角で顔面に出て口角へ向う。下唇動脈を分岐せず、口角上方で上唇動脈を分岐し、鼻背枝となり終る。オトガイ下動脈は口腔底を前走し、正中より17mmの所で下顎底を越えてオトガイに出る。そして下唇の口裂近くまで達してT字型に分かれて下唇へ分布している。上唇動脈は12mm径過後2枝に分かれ、1枝は鼻中隔へ、1枝は反対側の上唇へ分布している。

花井らの調査したカニクイザルではオトガイ下動脈が下唇動脈と吻合して下唇へ分布し、下唇動脈はヒトより発育が悪いという。ヒトにみられるオトガイ下動脈の下唇への分布は原始的形質なのかも知れない。

演題17. 誘発歯肉癌の制癌剤投与における核 DNA 量の変化——制癌剤投与と PAS 陽性反応との関係について——

○永沢 義安, 大屋 高德, 藤岡幸雄,
名和橙黄雄*

岩手医科大学歯学部口腔外科学第一講座

岩手医科大学歯学部口腔解剖学第二講座*

扁平上皮癌及びその前癌病変において、PAS 陽性物質がしばしば認められることはよく知られている。一方これらの PAS 陽性物質の本体について、glycogen であるとするものがほとんどであり、その意義については、細胞分裂との関連性、あるいは悪性度との関連性など種々報告されているが、その詳細については未だ不明な点が多い。そこで今回我々は、ハムスターの誘発歯肉癌に制癌剤を投与し、それによる癌細胞の変化と PAS 陽性物質との関連性について研究を行った。癌細胞の変化については、制癌剤 (peplomycin) の作用部位である核に着目し、核 DNA 量の測定を行い、これと PAS 陽性物質との関連性を比較検討した。

実験方法は、ハムスターの歯肉に0.5% DMBA アセトン液を塗布し、同時に歯科用クレンザーにて擦過を行い、歯肉癌を誘発した。癌を形成した後、制癌剤として peplomycin 10mg/kg を腹腔内に投与した。屠殺後通法のごとくパラフィン切片を作製した。パラフィン切片は、5 μ m の連続切片とし、PAS 染色と Feulgen 染色を交互に行い、PAS 染色陽性の場合には、さらに Amylase 消化試験を行った。Amylase 消化後 PAS 染色陽性部と陰性部において、核の DNA 量を Vicker's M85 を用いて測定した。

以上の実験結果より、制癌剤 (peplomycin) 投与後の PAS 陽性物質は、Amylase 消化試験により2群に大別され、Amylase 消化群での核 DNA 量分布パターンは一定の傾向を示さないのに対して、Amylase 非消化群では2n にピークを持つ核 DNA 量分布パターンを示した。